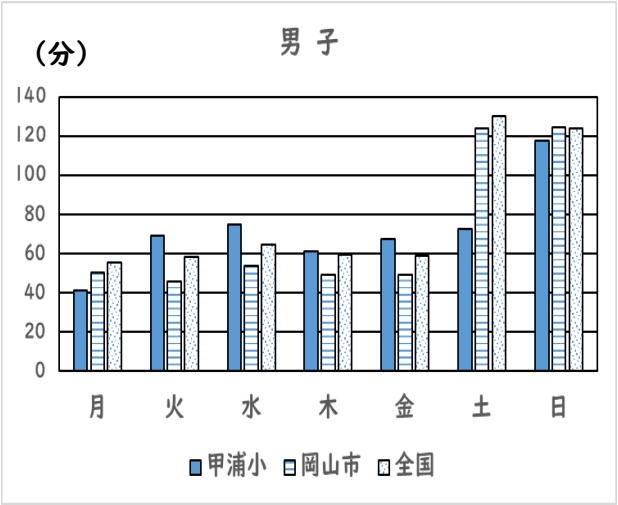
令和５年度　岡山市子どもの運動習慣定着化事業　実践モデル校取組事例　　報告様式

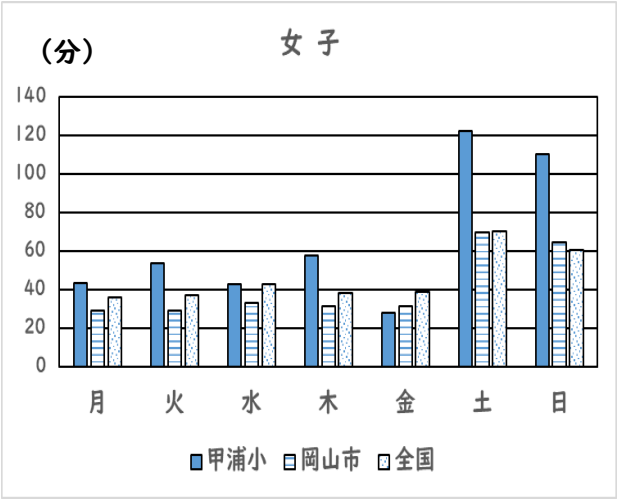
甲浦小チャレンジランキング！！

学校名	岡山市立甲浦小学校		校長名	名合　淳	
児童生徒数	226 人	学級数	12	教職員数	29 人

＜体育の授業以外の運動やスポーツの時間（曜日別）＞

（令和５年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査から）





1　児童生徒の実態

令和５年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果から

①　体力に関して

今年度の新体力テストの結果では、概ねどの学年、領域においても岡山市平均と同等、或いはやや高い結果であった。一方で、全国平均と比べるとほとんどの学年、領域で下回っていた。また、領域別に過去 10 年間の経年変化を見ると、ほとんどの領域で横ばい、或いは緩やかな低下傾向が続いていたが、握力とソフトボール投げにおいては低下の程度が著しいことが分かった。

②　運動習慣に関して

上グラフにあるように、運動やスポーツをする時間は、曜日によって多少の差はあるものの、おおよそ岡山市や全国の平均と同等か、やや多い傾向にあった。一方で、本校が独自に３～６年生児童を対象に行った運動習慣に関わるアンケート調査によると、１週間の内、体育の授業以外で運動時間が０分の日があった児童は 44.8%にのぼった。また、１週間を通して、体育の授業以外の運動時間が０分という児童が 4.8%、１～30 分が 1.3%、30～60 分が 4.8%という結果であった。

さらに、同アンケート調査で、１週間の内体育の授業以外で運動時間が０分の日があった児童に、どうすれば運動時間を増やせそうか尋ねた（複数回答可）ところ、「いっしょにする人がいれば」（32.3%）、「やらなければならないこと（習い事等）が減れば」（30.8%）、「誰かに誘ってもらえたら」（29.2%）、「運動の楽しさをもっと知れたら」（26.2%）、「簡単にできる運動を知ることができたら」（21.5%）、「運動のイベントなどがあれば」（21.5%）という順に回答が多かった。

2　取組の概要

上記の実態を踏まえ、本校では、岡山県が例年行っている「みんなでチャレンジランキング」という取組を活用し、「甲浦小チャレンジランキング」を実施した。これは、指定された運動に学級単位で取り組み、回数を競うというイベントである。

この取組は、①簡単なルールで誰でも取り組みやすい、②記録が伸びたり、他のチームと競争したりする、運動がもつ楽しさを味わえる、③記録や順位を上げるという目標をもって取り組める、④チーム（今回は学級）での絆が深まる、⑤岡山県のチャレンジランキングに登録することで、校内にとどまらず、県内のチームと競争したり、他の運動にも挑戦したりできるという発展性をもっている、といった魅力がある。

今年度本校では、下学年の部と上学年の部に分け、時間内に何回ボールをパスし合えるかを競う「ドッジパスラリー」と、長縄を跳んだ回数を競う「連続８の字跳び」の２つの運動に取り組んだ。その２つの運動を指定した理由は、新体力テストで「投げること」において特に低下が見られたことと、ルールが簡単で誰でも取り組みやすいことである。児童の意欲がより高まるよう、廊下に掲示コーナーを設け、開催期間中に日々記録と順位が入れ替わる様子をリアルタイムで見られるようにした。また、特に運動に取り組みにくい友達を学級内で誘い合ったり、励まし合ったりして、学級のよりよい関係づくりの機会にすることもねらいとして、児童の参加はあくまで自由とした。なお、この取組は児童会活動として、体育集会委員会が主体となって行った。

3　成果

体育集会委員会の呼びかけもあり、多くの学級が積極的に取り組んでいた。新たに記録が出るたびに喜びの声や悔しがる声、次回への意気込みの声が聞かれ、競争を楽しんでいる様子だった。

また、ルールが簡単であることから、運動が苦手な児童も取り組みやすく、参加する児童も徐々に増えていった。

取組期間中と、取組が終了して２週間後にも、運動習慣に関わる本校独自のアンケート調査を行った。その結果、１週間の内、体育の授業以外で運動時間が０分の日があった児童は、取組前の 44.8%に対して、取り組み期間中は 39.0%、さらに、取組終了から２週間後には 35.0%と、徐々に低下していることが分かった。

校内での取組が終了した後にも、異学年の児童が一緒に長縄を楽しむ様子が見られたり、引き続き岡山県のチャレンジランキングに挑戦するチームがたくさんあったりと、児童が楽しく運動に取り組むきっかけとなった。

教師にとっても負担が少ない取組であったため、持続的に無理なく取り組むことができるということも分かった。

4　課題・今後の取組に向けて

本取組は、児童の運動習慣について一定の効果をもたらした。一方で、運動習慣に関わる本校独自のアンケート調査によると、１週間を通して、体育の授業以外の運動時間が０分という児童は、取り組み期間中、取り組み終了後も、５％前後と取り組み前の数値とほとんど変化がなかった。

また、本取り組みに対する児童の意識は、体育集会委員会の働きかけのみならず、教師の働きかけに大きく影響されることが分かった。一時、児童が積極的に取り組んでいるように見えていても、教師の励ましや声掛けなどが少なくなると、次第に取り組む児童の数も減っていく傾向が見られた。逆に、教師が時々でも外に出て励ましたり、一緒に縄を回したり、教室で「今回はどうだった？」「頑張ってきてね。」などと声を掛けたりするだけでも、児童の意識は持続しているようであった。

以上のことから、教師が負担になりすぎない範囲で、児童に働きかけをすることが重要であるとアンケート調査によって浮かび上がってきた。特に１週間を通して運動時間が少ない児童に個別に声を掛けたり、周りの児童に誘うように促したりできるのは教師だけである。児童の運動習慣の重要性を全教職員で共通理解しつつ、今後も取組や働きかけを工夫したり継続したりしていきたい。